あなただけの瞳　シナリオ

やさしい狛犬

……先生。瞳です。入りますよ

あ……また電気つけてる。
だめですよ、もう消灯の時間、過ぎてるんですから。
怒られるの、当番の子なんですよ。わかってます？

……暗いの怖い、って……子供じゃないんですから。
はあ……しょうがないな。
じゃあ、ほら、一緒にお布団、入ってあげますから。
ね？　それなら怖くないでしょ？

……ふう、あったかい……。
言っておきますけど、これ、本当は規則違反なんですからね。
先生と一緒のベッドで寝てる、なんて他の人に知られたら、

もう私、ここに来られなくなっちゃうんですから。
……え？　そんなに慌てなくて大丈夫ですよ。心配しないで。
ちゃんと秘密にしておきます。
だから先生も、誰にも言っちゃだめですよ。
大人だけじゃなく、子供にもです。
例えば……先週の瞳ちゃんとか？　一昨日の瞳ちゃんとか。
最近、先生のお気に入りだそうじゃないですか。
よく指名して、部屋に呼んでるって……。

えっ、嫉妬じゃないですよ。何を言ってるんですか。
私はそんなつまらないことを心配してるんじゃありません。
ただ、先生が私じゃない他の女の子にもこういうことをしたら、
きっとすぐ噂になるから……。

そうしたら、先生のところに来てくれる女の子は誰もいなくなってしまいます。
先生、ひとりは嫌でしょう？
私も先生が寂しい思いをするのは嫌です。
心配なんです。寂しがり屋の先生が……。

……先生。先生の躰、今日はいつもよりずっと冷たいですね……
指先も、手のひらも、手首も、腕も、肩も……ひんやりしてる。
ちょっと寒かったですか？
昼間、窓を閉めていけば良かったですね……
少しでも先生に新鮮な空気を吸って欲しくて、わざと開けていったんですが……失敗しました。
もし、先生が風邪を引いたら、私にうつしてもいいですよ。
私の責任ですから。

……ええ、そうです。
先生の具合が悪いのも、良いのも、全て私のせいにしてください。
私、たまに思うんです。お母さんってこんな気持ちなのかなって。
先生の全てを私が守りたいって。守らなくちゃって。

……先生、ちょっと瞼が閉じかけましたね？
ふふ、私の話が退屈で眠くなってしまいましたか？
それなら今日のお話はなしということで……、
ふふっ、焦ってそんなに大きく目をぱっちり開けなくても大丈夫ですよ。
ちゃんと今夜もお話してあげますから。
大好きな先生のために……私の考えたお話を……。
そうですね……昨夜はどこまで話しましたっけ……

確か月の王様がお姫様をバラの楽園から追放したところまで……、
え？　そんな話は知らない？
……あぁ、これは先生じゃなくて違う先生にお話した物語でした。
ふふっ、忘れてください。

……先生、そんなつらそうな顔をしないで……
嫉妬してるんですか？　ふふ、ごめんなさい。
ちょっと意地悪しただけですよ……先生が私以外の女の子を指名したこと、本当はちょっとだけ怒ってたんです。
でも、もう許してあげます。
だから先生も許して……。

……先生にお話していた物語は、確か、こうでしたね……
汚いものを見過ぎたせいで、世の中の全てを憎むようになってし

まった大人の男の人たちが、事件などを起こしたりしないように、ある場所へと収容されて管理される、という話……。
彼らはこれ以上汚いものを見ると壊れてしまうから、その周りには常に、綺麗なものしか置かれないようになっているんです。
清潔なベッド。シミひとつない白い壁。
匂いのしない、枯れない花。
そして……身の回りの世話を、汚れのない無垢な少女たちが担っている。
彼女たちは彼らに優しく声をかけ、一日中ベッドに括り付けられているせいで汗ばんだ彼らの躰を、柔らかな手のひらで清め、目が合えば無邪気に微笑んでみせる……。
外に出ることすら敵わない彼らのために、彼らの瞳となって綺麗なものだけを見せようとする……。
そうして彼らは、自由を奪われた両の手足が次第に衰え、ボロ布

みたいになった皮膚にくっきりと骨が浮かび上がり、自身が最も醜く汚い姿になったことすらも気付かず、少女たちとの刹那的な幸福に酔いしれている……そんな哀れな男の人の話……でしたよね？

……ふふっ、何を言っているんですか？
先生の話ではありませんよ。
だって先生は手も、足も、まだ腐ってはいないじゃないですか。
ほら……冷たいけど、まだ動く。

……ね？　私の指、わかります？
小さくて……細くて……柔らかいでしょう？
不安ならぎゅって握っててていいですよ。
先生の硬い指先、私、好きですから。

……ああ、先生の瞳って、こうして見ると……不思議ですね。
光がなくてもきらきらしていて……
硝子玉みたいに透き通って……
あっ、瞳って、私のことじゃないですよ。
先生の躰にくっついている、本当の瞳のことを言っているんです。
ふふ、でも先生の瞳って、いい響きですね。
なんだか私だけが先生の瞳であるみたい。
本当はたくさんいるのに。

……ねえ、先生。ひとつお願いがあるんです。
実は、私……そろそろ先生のところには来られなくなりそうなんです。
その……理由は……先生もおわかりになるかと……その……わかり……ますよね……？

私の躰……変わり始めているの……
気付かなかった、なんてしらばっくれないでくださいね……
私の躰の変化を誰よりもいち早くお気付きになったのは、きっと先生です……
腰のくびれも……お尻の丸みも……よく手のひらで辿って確認されていたじゃないですか……
私が子供だったから許されたものの……大人の女性にあんなことをしたら、先生、すぐに刑務所に……
まぁ、ここもそれほど変わりはないですけど……。
だから、先生……私、きっと今日が最後……
ああ、落ち着いて、大丈夫、大丈夫ですから、
ね、暴れないで……。よしよし。

すぐに新しい瞳が先生の元に現れます……
きっと天使みたいに可愛い子ですよ。
私が来たときもそうだったでしょう？
先生、天使かと思った、って言ってくれたんですよ。
嬉しかったので、ずっと覚えてたんです。
そんな風に言ってくれるの、きっと先生だけだから。
両親のいない私がこの施設で育ったことを知って、そんな風に思ってくれる男の人なんて、きっとこれから先ひとりもいないから。
だから……先生だけが私の特別なんですよ。
なので、先生も……私を特別にしてください。

先生の特別になりたい。先生の瞳になりたい。先生だけの瞳に。
私だけが先生の瞳に。

……先生。目を瞑ってください。私に瞳を捧げてください。
先生の綺麗な瞳を。
醜い先生の躰の中に唯一残った綺麗なものを、
私に捧げてください。
私以外の誰も見ないで。私以外の誰も愛さないで。

既に私は先生に大切なものを捧げたはずです。
熱くて痛くて、でも大好きな先生だから我慢しました。
誰にも言いません。私たちふたりだけの秘密です。

だから、先生……次はあなたの番です。
先生が私に大切なものを捧げる番です。
方法はお任せします。
そこのテーブルに、ペン立てを置いておきました。

中には鉛筆、ボールペン、シャープペンシル、コンパスが入っています。
お好きな物をどうぞ。
まだ指は動きますよね？　手を伸ばせば届く距離にありますよ。
それでは先生、さようなら……いい夢を……

了

二〇二四年二月二十四日

やさしい狛犬